

神舞の灯を絶やさぬよう  
地域で知恵を絞ります

保存会長 佐々木 剛 さん(46)

伯父が松山神舞の師匠で、私はこの伯父から長刀舞を教わりました。現在は保存会のメンバーも少なく、皆、仕事の都合などもあり、決まった日時に集まるのが難しくなりました。それでも、ここまで受け継がれた神舞の灯を消してしまうわけにはいかないというのが地域の人々の考え。先輩方も練習をサポートしてくださるので、未永く伝承していきたいよう、私たちも知恵を絞っていきます。



↑全部で十面保存されている神舞の面

松山神舞

志布志市／松山町新橋地区

平成23年に再開した

松山神社に受け継がれる神舞

志布志市松山町の松山神社に古くから伝わる「松山神舞」は、神に奉納したり、五穀豊穰を祈願するための神舞です。神社で保管している古文書には、天明6(1786)年の正月に薩摩藩主の厄払いのために蓮花院(現在の志布志市役所松山支所の場所にあった寺)で神舞をしたとの記録があり、これが最も古い松山神舞の記録とされています。昔は国の祝い事などの機会に舞うものですが、現在は2月のごまつりや六月灯、年明けの元旦祭やまちのイベントなどで披露されています。

昭和62年4月20日、松山神舞は旧松山町の無形民俗文化財に指定され、これを機に「松山神舞保存会」が発足しました。近年、まちの過疎化や高齢化が進み、保存会発足当時の師匠方が亡くなられたことなどから神舞の継承が困難となり、休止状態にありましたが、このまま神舞の灯を消してはならないと、平成23年に再開しました。

現在、主に舞われているのは「鬼神舞」「剣

鹿兒島には、古くから受け継がれてきた個性豊かな祭りが各地に残っています。今回はそんな祭りの中から「松山神舞」をご紹介します。

「ユーモアのある掛け合いや口上が特徴的な田神舞は、幸い映像が残っています。集まりを絶やさず、いつかは田神舞を復元にこぎ着けたいですね」と語るのは保存会長の佐々木剛さん。過去に神舞を習ったことのあるお年寄りを探したり、小学生に神舞に関する話をする機会をつくって後継者を増やすことも考えているとのこと。祭を絶やしてはならないという地域の人々の思いが、松山神舞を支えているのです。



志布志市

志布志市は、平成18年に松山町と志布志町、有明町が合併して発足した総人口33,809人(平成24年9月1日現在)のまちです。鹿兒島県東部、宮崎県との県境にあり、市南東部は志布志湾に面しています。写真は文治4(1188)年に平重頼が築城した松山城址。11月開催の「大隅國やっちく松山藩・秋の陣まつり」では奉納武者行列などが行われ、5万人を超える人出でにぎわいます。